

## 将来予測

### 売上の予測

売上が大きく作用するのはLMEニッケル価格の上昇と海外売上高の67%が円安に作用するかどうかとうこと。今後は来年度に44万とのフェロニッケルの増量効果が働く。しかし、価格の下落と為替は円高になると予想し、2008年をピークに売上は減少する。しかし、長期の売上を考えた場合、レアメタルの埋蔵量や新たな開拓などコストがかかり、埋蔵量の減少から希少価値がますます上がる。しかし、いきなりニッケルをやめて例えばクロムのみというような以降をすぐにはできない。よってニッケルの需要が落ちることはなく、長期ではニッケル価格は徐々に少しずつ上がり、インドなどへの販売量の増加から売上は拡大し2011年以降2%上昇するとした。

### Rによると、LMEのニッケル価格の推移は

2006年で14900ドル、2007年、30000ドル。2008年は31100ドル。2009年で20400ドル  
2010年で、18000ドル。2011年で17000ドルと予想。  
その後はだいたい17000ドルから20000ドルあたりを推移していくと仮定した。  
為替としては徐々に円高に推移し、109円あたりを今後は前後するとした。

### 営業利益

2008年からの10%増産体制の効果と円高による売上の減少と2006年よりLMEのニッケル価格を2011年は高く設定したこともあり、売上高営業利益率は2006年の33.9%を上回る37.8%とした。2011年まではRの予想であり、その後は37%台を維持するとした。

### 売上原価率

今後の売上原価率だが、今期51%と低率なのは、コストよりもLMEのニッケル価格と円安が大きく関わりこのような数字が出たと考えられる。将来の売上原価だが、これは一概に言うことは難しい。まずこの会社はニッケル鉱石をフェロニッケルにするのに電気の消費が大きい。そして、コスト削減効果の一つとして大口顧客には電力会社が夜間は割引価格で電力を提供するため、電炉の使用はなるべく夜間に行うことが望ましい。そのため、需要の高まりのより増産体制を打ち出しても電炉の使用の時間帯を拡大するのか。工場の系列を増やすか等の判断は難しい。よって売上高 - 営業利益 - 販管費と逆算する形で求め、57%で2011年からは推移していくとした。

### 販売管理費

運賃諸掛と販売手数料が変動費で給与や賃貸料が固定費とすれば、ざっくり8対2となるが、一見変動費とみなせるこの2つの費用は販売量により影響されるものだと考え、この企業の売上は前年と同じ販売量だとしても、LMEニッケル価格と為替動向により大きく変わるため、全て固定費と仮定して、毎年2%の成長をするとした。

### 減価償却費

RによるとB/Sの資産側では50%が流動資産でそのうち30%が現金。10%が売掛金。10%が在庫。固定資産は35%で、全体に占める固定資産の割合が製造業としては低いのは大部分の償却が進んでいるからであり、07期と08期に大幅な設備投資を行うため、ざっくり減価償却はそれに見合っ、08年に30億、09年に30億、10年に40億、11年に50億。  
とし、その後は07/3期と同じ償却年数18.1年として減価償却費を求めた。

### 設備投資

今期は10%のフェロニッケル増量のため1系列の設備投資を行う。08期は195億。09期は100億、2010期は33億。  
その後は、33億の設備投資を続け、現状を維持するという方針をシミュレーションした。

### 海外売上高

海外売上高で多くを占めるのは台湾、韓国。中国の成長を見越して、今は2千から3千トンの販売だが、この中国への比率をさらに上げていくのかというところではなく、中国市場への参入には意欲的ではない。中国には鉄やニッケルなどの資源があるため、自国で賄えるからだ。よって10%の増量は中国ではなく、中国も今の比率を維持しながら、他方の例えばインドなどへの販売を考えているという。

### 長期FCF成長率

長期で見れば、LMEニッケル価格は伸び、レアメタルの希少価値は上昇すると考え、インフレ率以上とし2%とした。